説教要旨　「喜びをひろげよう」

ルカによる福音書　１９章１１～２７節

　ある主人が、王の位を受けるために旅に出ますが、留守を任せる僕に、１ムナずつ預けました。主人が帰ってきたとき、一人目の僕は１ムナを元手に１０ムナを儲け、二人目は５ムナを儲けていました。主人は１０の町の支配権と五つの町の支配権を、それぞれの僕に授けます。しかし三人目は、布に包んでしまっておいた１ムナをそのまま主人に差し出しました。この僕は主人から厳しく叱られ、持っている１ムナも取り上げられてしまいます。

　このたとえで重要なポイントは、“主人が王となって戻ってくる”ということです。この主人を、私たちの主人であるイエス・キリストに置き換えてみてください。十字架につけられ殺されたイエス様は、復活されてしばらく、弟子たちと共におられましたが、やがて天に昇られました。そしていつの日か、イエス様が王として戻ってきてくださるという、主の再臨がここでは見つめられているのです。そして主が戻ってこられた時、僕である私たちは、預けられたものをどのように用いてきたのかが問われます。この裁きの場にすべての人間は立たされるのです。イエス様が王として戻られる時、すなわち神の国が実現するその日、「ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ」（27 節）と語られているように、反対者は殺されてしまうといわれています。

　このたとえは、神の国はすぐにでも現れるものと思っている人々に向けて語られました。イエス様はそんな彼らに、神の国が実現したとき、み言葉を伝えられずにいる人々は、神様の敵として殺されてしまうが、それでも構わないと本当に思っているのか？それでも、すぐに神の国が実現してほしいと願うのは利己的な考えではないのか？イエス様は彼らにそう問いかけておられるのです。

　私たちはそれぞれにイエス様に出会い救いを受けて、神の国、神の支配を待ち望む私たちです。しかし、自分が救われたことだけで満足し、イエス様から預かったみ言葉を、誰にも伝えようとせず、人目につかないようしまいこんではいないでしょうか。

（２０２０・６・２１　説教者：稲垣真実）